
明日、晴れたら

蔡鷺娟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日、晴れたら

【Nコード】

N5957Y

【作者名】

蔡驚娟

【あらすじ】

短編『雨の降る日に』の続編です。

体と意識が入れ替わり、別人になってしまったケリーと智。（ついでにマイケル）

書類上では夫婦になったケリーと智のデコボコ（？）カップルのその後。旦那様が小学生って、アリですか？と悩むケリーと、自分はどう思われているのかと不安になった智が、すれ違いつつもお互いの気持ちを確かめ合う。

そんな二人を執事の陣内さんとマイケルが見守りつつ話が進みます。

海辺の広場、海岸で過ぎていくある一日のお話。

（前書き）

拙作『雨の降る日に』の続編になっています。まだお読みになっていない方はそちらを先に読んでいただく事を推奨します。短編と違っていいのか分からない長さになっていますが、お付き合いいただければ幸いです。

道行く人達の視線が痛い。

「ねえ見て。いいよね、青い瞳。憧れるな」

「ねー。欧米人って得だね、化粧しなくっても絶対可愛いもん、羨ましい」

磨かれたショーウィンドウに映る自分の姿を横目で見て小さくため息をつく。街を歩くといつもこうだ。好奇な人々の視線に晒される。帽子を被って金髪を隠していても、顔立ちは隠せない。だからと言ってサングラスにマスクをつけてまで顔を隠そうとは思わないから結局こうなってしまう。

青い瞳にしたければカラコンを入れればいいと心の中でつぶやく。自分だって昔はこっそり憧れていたのを棚に上げているのは承知しているが、この視線の束には本当に辟易して暴言の一つも吐きたくない。欧米人だからって別に万人が可愛いわけではない、とアメリカで暮らした数ヶ月の経験から知っている事実を大にしたい。他でもない“ケリー”が可愛いのだ。……それで私はすごく迷惑しているのだけだ。

背は今のところ日本人の平均身長くらいだけど、まだ成長しているから165cmとかそれ以上にはきつとなるんだろう。そうなたらなっただまたモデル事務所のスカウトとかがうるさいんだろうなあと思っただけのため息をつく。

「ケリー！ ちょっと待って！」

大またで人の流れをかくぐるようにして歩いていく私の後を、追いかけて来る小さな影。

今日のスーツは黒のズボンに黒のベスト。上着はダークブラウンとダークグリーンのチェックで、同じくダークグリーンのネクタイを締めている。なかなかおしゃれだ。完璧に磨かれた革靴で一生懸命走ってくるその姿を、仕方なく足を止めて待つ。

「……だから付いてこなくていいって言ったのに」

ようやく追いついてきたのは小学校高学年くらいの少年。黒のくりつとした目に茶色がかった髪。身長は私の胸くらいまでしかない。上から下までの完璧なコーディネートは執事の陣内じんないさんの仕事だ、いつもながら素晴らしい。ちなみに私の今日の格好も陣内さん一押しのお嬢様スタイルだ。派手すぎず可愛すぎず、私の好みに合わせてくれている。……けれども今言いたいのはそういうことじゃない。

「ちょっと買い物に出るだけだから、智ちは家で待っててって言ったじゃない。……私達一緒にいると目立つんだから！」

腰に手を当てて見下ろしながらそういうと、智はきよとした顔で私を見上げてきた。

「……目立つ？ ああ、そうか、ケリーが可愛いからだな！ うーん、それは問題だなあ。僕の可愛いケリーを他の男に見られていると思うと嫌だ」

少しの間考え込んでいたが、彼なりの結論に至ったらしい。そう

いうが早い、智は小さな手で私の右手を掴んだ。

「早く買い物をして帰ろう！　あまり外にいと可愛いケリーが攫われないか心配だ！」

大真面目な顔で智はそう言って、ずんずん歩き出した。手を取られてしまったので、されるがままについていく。目的地も知らないのに、と私は後ろで文句を言ってみるが、智はきよろきよろと入るべき店を探して聞く耳を持たない。

金髪碧眼、愛くるしい顔という日本人的欧米人の理想を見事に描き出した十六歳の私、ケリーと。

「やだー、超可愛い、コナン君みたい！」

「ううわ本当だあ。ってかあの二人ってどういう関係？　……きょうだい姉弟、はありえないよねえ？」

フルセットのスーツ姿も相まって、眼鏡がないのが残念なくらいにコナン君を地で行く十一歳の彼、智の関係が。

「……ほら、聞いた？　智。私達目立つんだってば」

「……コナン君とは何者だ？　可愛いと言われたぞ」

書類の上では結婚が成り立っている夫婦だとは、誰も思っまい。

* * * * *
* * * * *

そもそも私達は、体と中身が一致していない。

すっかりガイコクジンの顔をした私の元の名前は藤井真央ふじいまおといい、生粋の日本人だった。黒目黒髪、十人並みの容姿で商社に勤めるしがない会社員の二十六歳。今の体の元の持ち主、ケリー・スミス嬢はアメリカ・カリフォルニア州出身の十六歳。地元のハイスクールに通う普通の女の子だった。

彼女と私の接点、そして悲劇の舞台になったのはハワイ。私は婚約中の彼、知己ともみと、彼女はセレブな恋人で幼馴染のマイケルと旅行中だった。偶然にも同じイルカウォッチングのツアーに参加して、小さなクルーズ船に乗っただけだというのに、私達四人の運命はぐちゃぐちゃにかき混ぜられた。

海の上での突然の嵐に巻き込まれた私達。船の外でひとり暢気にワインを飲んでいたマイケルが風に吹き飛ばされたのを助けに行った私の彼はそのまま海へ転落。私とケリーは嵐に煽られた船内で、一緒に壁に激しく叩きつけられた。

病院で目を覚ました私は、覗き込んでくる二対の青い瞳と、捲くし立てられる英語の応酬にパニックになり再び意識を手放した。――そう、私はケリー・スミスとして、彼女の体で意識を取り戻した

のだ。私の元の体は死亡確認され、目を覚ましたときには既に灰になって日本へ帰っていた。訳もわからず途方にくれ、とにかくケリーに成りすますしかなかった。英語がほとんど話せない私を“両親”は事故のショックだろうと寛大に受け止めてくれた。

私がずっと気になっていたのは最愛の彼の行方。マイケルと一緒に大きく海に投げ出されたのを見たのが最後で、その後の行方が分からなかった。生きているとしても奇跡に近い。それでも確かめずにはいられなくて、両親に頼み込んで日本にやって来た。

やっとの思いで辿り着いた彼の家。インターホンに応じて玄関から顔を出した彼の顔を見て、私は奇跡つてあるものだと思った。でも喜びも束の間、彼の口から出たのは“彼の恋人”の名前。

『……ケリー、君、どうしてここに？』と言った彼の流暢な英語。その瞬間、私は彼の身に起こったことを理解した。私の彼、斉藤知己^{さいとう ちみ}の意識は消え、その体にケリーのわがまま彼氏、マイケルの意識が宿ってしまったことを。

それは私がずっと想い続けていた知己の顔だったのだけれども、その事実気付いた瞬間、絶望と共に思わず殴ってしまったことは智にも言っていない。ただあの嵐の海で、マイケルが悠長に構えてひとり船外にいなければ、私達と一緒に大人しく船室に入っていてくれたなら、知己は死なずに済んだかもしれないという思いが消えなくて、殴らずにはいられなかった。……今でもあの男を許す気にはなれない。たとえばあの男も自身の体をなくして日本人として生きなければならぬという同じ困難を抱えているとしても。

智は、私の手を握って上機嫌で前に行く少年は、中身年齢三十歳の元イケメン会社社長だ。二年半前の不幸な事故で、今の少年の体と入れ替わり、自分の体を失くした。

私と智の出会いは、雨の日だった。知己、もといマイケルと最悪の再会を果たし、絶望に打ちのめされた私は自殺を決意した。波飛沫が割れる崖の上から飛び降りた私を、助けてくれたのが智だった。海に向かって落ちていく私に向かって小さな智が飛び込んできたとき、何故という思いでいっぱいだったが、智は私の意識がケリーではなく真央であることに気が付いていた。

海から引き揚げられて目を覚まさなかった私を辛抱強く看病してくれた智は、目覚めた後でとんでもない爆弾を二つ落としてくれた。

一つ目は、彼が私が勤めていた会社の社長で、以前私が傘を貸したそれだけのきっかけで私に恋をしていたということ。

二つ目は、私のビザの関係で言いながらも、勝手に書類上で結婚を成立させていたことだ。

* * * * *
* * * * *

「ほら、ケリー、これなんかどうだ？ ピンクが似合うから、ケリーには」

フリフリのレースがふんだんにあしらわれたピンク色のワンピースを、智はしきりに勧めてきた。無理矢理立たされた鏡の前で自分

とピンクのフリフリを見比べてため息をつく。……確かに、“ケリー”の顔にはピンクが合っているしフリフリだってなんだって着こなせる。妖精のように可愛いだろ。しかし着るのは“私”だ、心が持たない。ピンクのフリフリなど断固拒否する。

「……もうちょっとレースの少ないのがいいな。大人っぽいヤツにして」

ため息と共にそういうと、智は見えない耳をぴよこんと生やし、瞳を輝かせて大人っぽいワンピースを物色しに向かった。

……アレの中身が三十歳のオッサンで、計上利益数百億の商社の社長だとは誰も思うまいと、大きいため息について私は自分で自分好みの洋服を探しに行く。

値札を見ないようにして滑らかな肌触りの緑のワンピースを手にとった。お金持ちのお坊ちゃまである智と買い物に出ると、どうしても高級ショップに連れられてしまうから、本当は一緒に来たくない。そもそも私はお金を稼いでおらず、正直言って今無一文だ。生活できているのが智の好意に甘えているからで、私としてはきちんと帳簿に付けておいておいおい返していこうと算段している。もっとも、智に言わせれば、「君は僕の奥さんなんだから、お金なんて気にしなくていい」と言うのだが。

ケリー・スミスとして人生を生きようと決心が付いたのは、智のお陰だ。彼が献身的に看病してくれて、目覚めた後も親身になって話を聞いてくれたお陰で心の整理が付いた。せつかくもらった命だ、もったいなく落としてしまったのは、私の体と共に消えたケリーに申し訳ないと思えるようになった。

実際同じ境遇の智もそういう風に思っているのだと、一緒に生活

するうちにわかってきた。今の智の体の元の持ち主は使用人の孫だったのだ、ということしか智は教えてくれない。でも私は誰なのかがなんとなく分かってしまった。隠せるはずもない、目元も全体の雰囲気も良く似ているのだから。

孫は死んでしまったはずなのに、目の前にいる主人は孫の姿をしているなんて、その人にとっては非情に複雑な思いだろう。だから智は、智のせいでは決していないのだけれども、消えた少年に申し訳ないという気持ちで日々生きているんじゃないかと私は感じている。そういう部分は、大人な考え方ができてスマートに振舞えるところは、とても素敵だと思っている。思っているが……。

「ケリー、こっちはどう？」

嬉しそうに持ち上げたサーモンピンクのワンピースと、ローズピンクのスカートを両手に、智はこれならどうだとにこにこ笑っている。

「……どこまでピンク押しなの？」

ため息をついた私の元へ、とことことやってくる彼。見上げて来るきらきらした瞳。ばら色に染まった頬。

……どう見たって小学生な可愛い男子の子を、どう旦那と認識しろと？　これが肉体年齢十六歳、精神年齢二十六歳の私の目下の悩みである。

- - - - -

僕の奥さんは可愛い。百人が百人可愛いというであろう可愛さ。何も色目を使っているわけでも僕の目が腐ってしまったからでもなく。

今の彼女は生粋のアメリカ人の顔だから彫りもそれなりに深し鼻も高い。何より澄んだ湖の底のような青い瞳と輝く金の髪は存在するだけで人目を引く。僕もお世辞や持ち上げやらを一切抜いて、もろ手を挙げて可愛いと叫べる。馬鹿と言われようともかまわない、そういうレベルだ。執事の陣内だってケリーが何を着せても似合うため、最近は僕のことよりもケリーのコーディネイトに気合が入っている。彼女は気づいていないだろうけどね。

だけどあの姿になつてからいろいろな人に声をかけられ「可愛い」と言われるたびに、彼女が内心で傷ついていることを僕は知っている。賞賛や羨望とは無縁だった以前の自分と無意識に比べて複雑な気持ちになっているんだろう。

僕に言わせれば日本人であつたときの切れ長の一重の瞳も、短く切りそろえて頬の辺りで揺れていた黒髪も、丸い鼻も、全てが可愛らしかった。彼女は平凡で何の変哲もない顔と言っていたけど僕には天使のように思えていた。

だけどたとえ君がどんな容姿であつたとしても、僕には関係なかった。

——ねえ、知ってる？　僕が君を好きになつたことに、君の容姿なんか関係ないってこと。

君がどんな姿でも、僕は君に恋をしただろう。
優しさをたくさん抱えて、それを誰かに分け与えることができる、
君に。周りに気を配れて、進んで嫌な仕事を引き受けていた君に。
小学生の姿だってちゃんとひとりの人間として扱ってくれる、君に。

ケリーは結局自分で選んだダークグリーンのワンピースと、僕が
選んだ控えめなローズピンクのスカートを購入した。ケリーは可愛
いんだから何を着たって似合うといっているのに、ケリーは派手す
ぎるものを好まない。だから選ぶのにも苦労するけど、いつも僕が
勧めたものを一つは取り入れてくれる。

「ねえ、智、私別に服を買いたかったわけじゃないんだけど」

店を出ると彼女は出し抜けにそう言った。買った後で言っても何
の説得力もない発言なのだが、僕が勝手に入った店で買い物をした
のは彼女なりの気遣いだ。僕の方もそれも計算に入れた上で突っ走
っているのだから確信犯なわけだし。

「じゃあ何が欲しいの？ どのお店？」

さりげなく手を繋いで僕はケリーを見上げた。ケリーは困ったよ
うに僕を見下ろして、顎に手を当てて考え込む。……これは僕を撒
こうと考えているな。

「えと……、あの下着を買おうと思って……」

うまい言い訳を考え付いたと思っているだろうけど、僕には通用しないよ、ケリー。恥じらいにすこし赤くなった頬に手をやって演技中なのもバレバレだ。

「そっか、じゃあ行こう」

「え、ちょ、さと……」

そういうが早いか、僕はケリーの手を引いてランジェリーショーツへと向かう。確かこの先に品の良さそうな店があったはずだ。ケリーは僕の行動に驚いて口をぱくぱくさせているが声になってない。ケリーの頭の中では『三十のオッサンが嬉々として下着買いに行くなんてちよつと！』とか思っているのだろう。まあ確かに僕が以前の体だったなら、一緒に行かずに『ここで待ってる』とか言っただろう。しかし、今の僕は……

大人の常識など気にも掛けない、子供の姿なのだから。

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

「……なんであいつらはああいっただけで巡ってんだ？」

広場に面したカフェのテラスで、コーヒーを飲みながら思わず呟いた。視線の先では帽子を目深に被った少女とスーツ姿の少年が、手を繋いでぬいぐるみの店から出てきたところだ。帽子を被っていても分かる、日本人とは違った顔つきの美少女と、見るからに育ちの良さそうな少年という組み合わせの珍しさでふたりはかなり周囲の視線を集めている。

このカフェは二階建てで、一階にもテラス席はあるが張り出したウッドデッキの上から海を眺望できる二階のテラス席が人気だ。もちろんオレ自身は海が見たくてここに座ったわけじゃない。目の前で優雅に紅茶を飲む白髪の紳士に無理矢理連れて来られたから仕方なく付き合っているのだ。

「ふふ、ケリー様は智様を撒こうとお考えなのですよ。普通男性が嫌がる可愛いお店を選んでおいでですから」

紅茶のカップを手にとって微笑んだ目の前の紳士に、どこからともなく「ああ〜ん」という色っぽい嘆息が上がるのをオレは半分気を遠くして聞いた。ただだけ他人に興味があるんだよ、日本人！と大声で喚き散らしたいほどに、オレたちはカフェ中の女性からの視線を一身に集めていて、正直言っただけ居心地が悪い。

そりゃそうだ、黒のロングジャケットをかつちり着こなした優しそうな眼鏡の白髪紳士。もうどこからどうみても“執事”っていう言葉しか浮かばない人物の前に座る、普通のスーツを着込んだ若いだけがとりえのような可も不可もない顔立ちのサラリーマン風の男。「一体どういう関係なの!?」というこそ声があちこちから上がるのが聞こえて本当に居た堪れない。関係があるとすれば、限りなく無関係に近い関係なのだけだ。

「おお。今度はファンシーグッズのショップですか。確かに三十台男性にはキツイでしょうなあ、ねえ、ともみ知己様」

オレが女性達からの視線と闘っているときも、目の前の紳士の視線は敬愛する坊ちやまとお嬢様から動いていなかったらしい。周囲の視線などなんのその、彼がオレを連れて無理矢理カフェの二階、シヨップの集まった広場を見渡せるこの席を陣取ったのは、眼下の二人を監視、ではなく“見守る”ためなのだそうだ。

ちらりと下に目をやれば、自分から入りたいと言ったくせにいざ入るとなつてがっかりした表情のケリーが見えた。その手を引いている少年の嬉しそうな顔と言ったら。もうすっかり冷めてしまったコーヒーを啜つてため息をつく、紳士の視線がいつの間にか自分に向いていた。

「……ん？ ああ、そうだな……」

タイミングのずれた返事をぼんやり返すと、白髪紳士は更になっこり微笑んだ。……だからやめてくれ、無駄に微笑むのは。

「こちらでの生活は慣れましたかな？ お仕事の方は順調と伺っておりますが」

全く関係のないところから繰り出されたジャブに、オレは一瞬言葉詰まらせた。このジジイ（もう紳士とか呼んでいられない）もそうだしあのガキ（雇い主だろうがかまうもんか）も悪趣味なほどオレをからかって楽しんでいる。

「……まあ、おかげさまで、なんとか。日本語も、様になってるだろう？」

「ええ、まだ日本に来てから一年とは思えない上達ぶりですよ。良かったですね、お仕事に就けて」

「……ああ」

そう、オレはつい一年前初めて日本に来た。ハワイの病院まで迎えに来た“知己”の両親に連れ帰られる形で、名前だけは知っていた小さな国へ、“日本で生まれ育った日本人”として“帰ってきた”のだ。

故郷のアメリカに帰れたとしても、両親には会えないという諦めがようやくついたのはほんの数ヶ月前。オレを溺愛していた両親が、派手にオレ、マイケルの葬式を出してくれたと教えてくれたのは他でもない、智だ。

両親の中でオレはもう死んだことになっていると分かったこと。

そしてこちらの両親——この体の元の持ち主、さいとうともみ齊藤知己の両親が、日本語を話せなくなった“息子”を、事故のショックだろうと懸命に慰めてくれ、生きて帰ってくただけいいと泣いてくれるのを見て、オレはここからの人生を齊藤知己として生きていくことを決めた。

そう決意したものの、見てくれは完璧に日本人なのに日本語が話せないオレがどうやって仕事を探したらいいのかと、途方にくれていたところ、子供の体ながら社長職を密かに続けている智が、自分の会社で働くことを提案してくれたのだ。ただしそれには条件があった。オレは三ヶ月以内に日本語をマスターしなければならなかった。ゼロからのスタートで三ヶ月という期間は正直言って厳しかった。しかしそれさえクリアすれば働ける、知己の両親だって安心できると懸命に勉強して一月ほど前に智の経営する商社の対外国営業職に就く事ができたのだ。

「……感謝している、本当に。智はもちろん、ケリーにも。……本

当は、謝らなくてはならないのだろうけど」

コーヒーを飲むのを諦めて視線を海のほうへ投げると、広場ではまたあの二人が周囲を騒がしくさせていた。ファンシーグッズの店を飛び出したケリーを追いかけて、智が走っていく。……喧嘩でもしたのだろうか。

「……変わりましたね、あなたも」

同じく視線はケリーと智を追いかけてながら、白髪の紳士、執事の陣内さんが笑った。智はちょこまかと走って無事にケリーを捕まえたようだ。今度はどこへ行くのかと頼杖を付いて見守る。

「……真央様がお亡くなりになったと知ったときの智様は、沈んで沈んで、とても見てはいられなかった。あのお姿になってからも続けてこられたお仕事全てを投げ出し、悲しみにくれたのです」

オレも陣内さんも視線を下の広場に向けたまま、会話を続けた。オレは陣内さんの顔が見れなかった。陣内さんの低く渋い声が小さく耳に届く。

「長いこと智様は元気をなくしておられた、しかしお強い方ですから、それではいけないとお仕事を再会され頑張っておられた、そんな時期でしたよあの雨の日は」

ベンチに座ったケリーに、ソフトクリームを買って手渡す智が見える。どうやら智が何かやらかして、謝っているようだ。ケリーは頑としてソフトクリームを拒否していたが、しばらくするとしぶしぶ受け取った。結局いつもケリーが根負けしてくれるのだと、智がいつだったか自慢げに言ってきたのを思い出す。

「ケリー様に続き智様が海に飛び込んだのを見て、わたくしは肝をつぶしました。ケリー様の中に真央様がいると、智様がおっしゃったときも、前例がなければ智様の頭がとうとうおかしくなったのかと思ったでしょうね。しかし智様本人が体と中身が違っているのですから説得力があります。智様は献身的にケリー様の看病をされ、わたくしも微力ながらお手伝いし、こうしてお二人とも大きな怪我もなく回復されました。今ではあんな風に仲睦まじくされているのを見るのができ、わたくしは本当に安堵しております」

広場の海側に面しておかれたベンチは今やラブラブムード全開の二人の世界だった。ケリーが舐めるソフトクリームに智が横から顔を出し、一緒に食べている。自分で持つて食べな！ とケリーが差し出すと、智は首を振るのに、ケリーが食べていると自分も食べたがる。……わざとだな、とオレだけじゃなく周囲の男共は皆思っているだろう、羨ましいいな子供は、とも。しかし智のあの愛くるしい顔の下に、実は三十男の意識があることを知っているオレとしてはかなり複雑だ。

「……仲睦まじいとか、そういう言葉で片付けてしまっているのかよ、あいつら」

いい加減目が痛くなってきたオレがため息まじりにそう言つと、陣内さんは事もなさにさらにと言いつつ放った。

「かまわないでしょう、天下が認めるご夫婦ですから、お二人は」

「……はあっ!？」

あまりの衝撃に思わずオレが立ち上がると、陣内さんも広場の様

子を見ながらおもむろに立ち上がった。

「おや、ご存知なかったですか？ ……移動なさるようですね、わたくし達も行きましょうか」

口を開けたまま立ち尽くすオレには目もくれず、さっと伝票を手にした陣内さんは、周囲の女性のうつとした視線に笑顔を振りまきながら下へ下りる階段へと向かっていく。

実は仕事だったオレは、これ以上付き合っている時間もないのだが、気になる言葉を言い捨てられてそのままにもしておけず、仕方なしに黒のロングジャケットの後を追う。

「海の方へおいでになるようです。わたくし達はあちらから、さあ」

すでに支払いを終えて涼しげな顔でオレを待っていた陣内さんは、ケリーと智が行った方と反対側を指差した。どうやら“見守る”作戦は見つからないように続行するらしい。完全に振り回されているオレは、スプレーでセットしておいた髪を思いつきりぐしやぐしやに崩し盛大にため息をついた。

* * * * *
* * * * *

子供の顔をしていても、智は“大人”なのだから、ああいう可愛

いお店には入れないだろうと思った私がバカだった。“大人”だからこそ、智は計算していたのだ、“子供”なら入れる、と。

ランジェリーショップも、ぬいぐるみやも、ファンシーグッズの店も、智は嬉々として入って行き、違和感なくその場に溶け込んだ。そしてここぞとばかりに様々なものを買おうとするので、それを止めるのに私は必死になってしまった。無駄遣いはしたくないと思っている私にとって、レースの装飾過剰な下着も、でっかいクマのぬいぐるみも、カラフルな髪留めも、全て無用の長物だ。あってもいいけどなくても困らない、むしろ必要がない、だから要らない。そう繰り返しているのに、聞く耳を持たずに財布を取り出す智に、とうとうキレた私は智を置き去りにして店を飛び出したのだ。

ところが意外と足の早かった智にすぐに追いつかれてしまい、逃亡は失敗。結局ベンチに座らされ、ソフトクリームをおごられてしまっただけでなく、しかもただおごられているだけでなく、一つのソフトクリームと一緒に食べるというまさかの恥ずかしい展開。なんとかかんとか食べ切って、ため息をつく私とは対照的に智は満面の笑みを浮かべている。

「……何がそんなに楽しいの？」

げっそりと私が尋ねると、智はその瞳を輝かせる。

「ケリーと一緒にいられるだけで楽しいんだ」

ぴよこんと生えた耳と、ふさふさ揺れる尻尾が見えるのは幻覚だろうか。やはり一度生死の狭間を彷徨うと……

「ケリーが僕の傍にいてくれることが、何よりの幸せなんだ」

「……っ！」

……満面の笑顔でまた爆弾を落とされて、私は続く言葉を失った。ここにこと私の様子を見守っている智からぷいっとな顔を背ける。どうしてそう、恥ずかしい言葉を臆面もなく言えるのだろうか。

「恥ずかしい言葉じゃないでしょ？ 僕の正直な気持ちなんだから」

心の内を見透かすように智は言う。もう本当に太刀打ちできない、この男には。

「……ねえ、ケリーは……」

「ん？ 何？」

先ほどまでの自信はどこへ行ったのかと思うほどに小さく、震えたその声と言葉に智を振り返ると、彼は私の服の裾をぎゅっと握って真剣な顔で私を見上げてきた。赤くなっている頬、少し潤んだ瞳。真剣そのものだけど不安を隠せていないのがありありと分かる表情。

口を開けたり閉めたりしながらもなかなか言葉を発しない智の、茶色がかったまっすぐな髪にそっと触れた。

硬いのかと思っていたのに意外なほど柔らかい感触に驚いて手が離せなくなる。智は赤かった顔を更に赤くして、じっと私を見上げている。いつも余裕綽々の智が珍しく口ごもっているのを見て、おかしくなってしまうて笑う。黙って撫でられ続けた智はぼそぼそ、と口を動かした。でも。

「……せ？」

小さな口から零れ落ちた小さな小さな呟きを聞き逃し、私は首を傾げた。

「え、何？」

「……ケリーは、どう？ ……僕と一緒にいて……幸せ？」

何とかかんとか搾り出すように呟かれた言葉。想定していなかった問いに、私はまばたきを一つして固まってしまった。

返事を求めてじっと見上げて来るその熱い視線に、ひしひしと伝わって来る願う様な思いに、私は何も言えずにただ見つめ返した。

——幸せか、なんて、言えるわけじゃない。

心の中でそう呟いたら、何だか恥ずかしくなって思わず私は智から視線を逸らした。

私が何も言わず顔を背けたことで、彼はしゅんと頂垂れて一気に元気をなくしてしまった。怒られて耳の垂れた犬を連想させるその姿さえ可愛いと思ってしまう私は、既に重症だと思うのだけれど。

——本当は、言つべき言葉を持っている。私の、気持ち。

「……ね、浜辺まで行かない？」

沈黙を破って私が小さくそう言うと、彼は俯いたままでこくと頷いた。その様子を見て、私はまたこっそり笑ってしまった。黙って立ち上がった智の手を引いて、私は砂浜へ降りる階段へ向かった。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

ケリーが何を考えているのか分からない。

男三十、それなりに過ごしてきているいろいろ経験もある。会社を経営しているくらいだ、一人前と言ったっていいだろう。けれども今、僕の手を引いて砂浜をはだして楽しそうに歩く女の子が、何を考えているのが全く分からない。

ショップの立ち並ぶ広場から続く長い階段を下りれば、そこは波が打ち寄せる小さな浜辺になっている。夏だったら海水浴客でにぎわう場所なのだろうが、今は人気もなく静かだ。広場の喧騒からも離れ、ただ波の音が響く浜辺は、まるで別の世界にきたような不思議な感覚をもたらす。……まるで、この世界に君と僕、ふたりぼっちのような。

「……智って、かなりのロマンチストだね」

不意に笑いを堪えた声が聞こえ、僕は首を傾げ視線を上げた。広場の建物に消える寸前の太陽の光が、苦笑するケリーの横顔を照らしている。

「声に出してたよ、今。……確かに浜辺には二人っきりだけど、世界は言い過ぎよ」

そう言つてケリーはそつと僕の手を離し、反対の手に持っていた靴を放り投げて波打ち際に駆け出した。波と戯れてきゃらきゃら笑うケリーの声が、波に吸い寄せられる砂と一緒に消えずにあたり小さく響く。大きな波の音にかき消されない楽しそうな笑い声が、今の僕には少し痛い。

先ほどまで手の先で感じていた温もりを無意識に探してしまい、呆然と手のひらを見つめる。繋いでくれる手も、かけてくれる言葉も、向けられる笑顔も、嬉しくなるほどに温かいもので。

幸せか？ と尋ねたのは、時期尚早だったのかもしれない。

一緒にいるだけで嬉しすぎて調子に乗りすぎた。ケリーが毎日文句を言いつつも傍にいてくれるのをいいことに、僕は夢を見ていたのだ。彼女が、僕を受け入れてくれたと、そう思いたくて。

うやむやのうちの“結婚”という形でもって、“アメリカ人”である彼女が本来持っていた選択肢を奪った。日本でひとり暮らすことも、アメリカの家に戻って生活することも、彼女は選べたはずだった。その全ての退路を奪って、僕の傍にいるしかないように仕向けて、それでいつか振り向いてくれるだろうなんて。どう考えたってフェアじゃないのに気づかない振りをしていた。……目を、瞑っていた。

東に向かうこの海岸は、高い建物に太陽が遮られることもあつて夕暮れのオレンジとは無縁だ。水平線は深い群青に染まって、空も夜の色へとカーテンを掛け変えたした。

暗くなつてきているのもお構いなしに波と戯れ続ける彼女をぼんやりと眺めながら、僕は乾いた砂浜に腰を下ろした。

「さーとーしー！　ねえ、見て！　カニ捕まえた！」

大声で僕を呼び、手の中の戦利品を嬉しそうに掲げる彼女。消え
そうな光の中で揺れる金の髪は、それ自体が光を放つかのように美
しい。

——ねえ、僕から好きだと言っただけで、そういえば聞いたこと
がなかったね。君にとって、僕は何なんだろう。

僕は僕の名を呼ぶ彼女の声に返事もできないまま、その場に座り
込んでいた。

- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -

夕闇に染まっていく海岸で波と戯れるケリーの姿。
それは幼いころから一緒に遊んでいた、誰よりもよく知っている
女の子の姿だというのに、あの頃の“彼女”は、もうこの世界には
いない。

「普通は逆じゃないか？　見た目的には智が遊んでてケリーが見て

たほうが自然だよな」

目の前の光景を見た感想をそのまま口に出して、すぐにまた余計なことを言っただけだと思った。陣内さんは隣で穏やかな微笑みを崩さずにオレの疑問に答える。

「まあ、見た目年齢ではそうですが、実年齢としては智様のほうが若干上ですから。それに女性よりも男性の方が、悩みだすと深く考え込んでしまう傾向にありますからね」

広場とは別の海岸を見下ろせる小さなスペースに身を隠し、見下ろすオレ達の視線の先で、智は座り込んだ小さな体を丸め、ぼんやりとケリーを見つめている。思いつめている様子が背中からでも見て取れるほどだ。

「……智は、何に悩んでいるんだ？」

思わずまた口に出してしまった言葉を、再び陣内さんが受け止めてくれた。

「これはわたくしの推測に過ぎませんが、恐らく、智様は気づかれたのでしょうか。ケリー様のお気持ちを未だ尋ねていないことに」

「は？ だってさっき夫婦だって」

「確かにご夫婦なのですが、事情が特殊ですから。ケリー様の意識がお戻りになる前に智様が書類上での結婚を成立させてしまわれたので、未だにご存知ないでしょう。ケリー様が智様をどう思っているか」

オレは呆然と口を開いたまま陣内さんの話を聞いていた。なんだ、書類上での夫婦って。ってかちよつと待て。納得するところだったけどあいつら高校生と小学生だろ？

海風に乱れた白髪を優雅な所作で押さえつけた陣内さんは、オレの心を読んだ様に言う。

「ケリー様はご両親の同意があれば結婚できる十六歳ですね。智様の肉体年齢は十一歳ですが、書類上では三十歳なので。……ああ語弊がありますね。智様は、現在も戸籍の上では三十歳の市川智としての身分を持っている、ということでお分かりですか？」

につこり笑ってこちらを見たはずの陣内さんの目が笑っていなくて怖かった。見えない圧力を感じたオレは慌ててない頭をフル回転させて答えを導き出す。

「えと、つまり、結婚したのは十六歳のケリーと三十歳の智、ってことか？　なんだそりゃ……滅茶苦茶だろ」

「死亡届けを出さなかったものですから。まあ誤魔化せているならば問題ないのでは？　納税もしておりますし」

その陣内さんの微笑みに何だか黒い影を感じ、オレはぶるつと震えた。海風が冷たいんだ、ということでも無理矢理自分を納得させて愛想笑いをする。ああ、こういう時に使えばいいのか、会社で覚えた日本人スキルは。

「智様にとってケリー様、もとい真央様は実は初恋なのですよ。もちろん以前にもお付き合いしていたご令嬢などはいらっしゃいます、それは感情の伴わない政略的なもの。智様は順番を間違えてしまわれましたから、気持ちを確かめるといって根本的な部分をすつか

り忘れておいでなんでしょうね」

そう言って陣内さんは砂浜に佇むふたりを優しく瞳で見下ろした。先ほどのブラッくな感じは既に影もなく、オレはほっとため息をついて同じように下を見た。

ケリーは未だに一人で波と戯れている。ここから見ているだけでも、智の背中が可哀想すぎて不憫だ。思いつめている感じがものすごくする。

「あのご様子では恐らく、ケリー様にご自分のことをどう思っているのかをお尋ねになったのでしょうか。しかしケリー様は明確なお返事を返さなかった」

「……………」

傍で一部始終を見聞きしていたのではないかと思えるほどに具体的な推測に、オレは曖昧な笑みを浮かべて黙っていた。余計なことを言う口は意志の力で閉じておく。

「わたくしが見たところ、ケリー様のお気持ちははっきりしているのではないかと思うのですが、やはりご当人である智様には分かりづらいのでしょうか」

柔らかな微笑みの下で何を考えているのか、オレにはちつとも分からないが、彼の観察力は尋常ではない。ましてや日々あの二人の様子を見ている陣内さんがそういうのならきつとほぼ間違いないのだろう。オレは砂浜の上で未だ座り込んだままの智に視線を遣り、そして子供のようににはしゃぐかつての幼馴染の姿をした別人を見る。

「…………… なんだかんだで傍にいるならそれが答えだろうが」

オレの呟きに陣内さんは同意するように笑った。

「それがわからないから、難しいですよ、恋愛は」

陣内さんとオレがこっそりとかつ生暖かく見守る視線の先で、遊びつかれたのか、ケリーが智の隣に腰を下ろした。智は小さく縮こまったままだ。

「……早く気が付いてやれよ、智。オレが言えた義理でもなんでもないけど」

カチカチに固まってしまっている小さな背中を見て、どんだけ鈍感なんだよ、と苦笑する。オレはすっかり目の前で繰り広げられているもどかしい二人を単純に応援している気持ちでいたけれども、不意に笑えなくなった。

それは、その気持ちは、ただオレが、他でもないこのオレが解放されたいというだけの、身勝手な思いなんじゃないか？

オレが不幸にしてしまった二人の女性、ケリーとマオ。体と意識が入れ替わったことはオレの手に負えない神の領域の問題だと思う。それでもその原因は、ケリーと知己が死んだ原因は自分にあったと、今は認めることができる。

再会したときのケリーの顔。マイケルオレに対する憎しみが溢れたあの顔を忘れることはできない。あれはマオの感情、だけど、ケリーは……きつと、ケリーも。

——なあ、ケリー。お前オレのこと恨んでるよな。

視線を上げれば絶え間なく波が打ち寄せる薄暗い海。その海の遙か彼方にある、慣れ親しんだオレ達のふるさと。一緒に通ったハイスクールも、家の近くの浜辺も昔遊んだ公園も、映画館もハンバーガーショップも。“彼女”は二度と帰れない、あの場所へ。

——ごめんな。いつか天国で会えたら、きっと直接謝るから。

海の方角から吹いてきた弱々しい風が頬に当たった。さっきまでは冷たい海風だったのに、何故か暖かい気がして息が詰まる。

——っ、ケリー。……本当に、ごめん。

見下ろせば手の届く距離にいる今の“ケリー”。でも彼女に会わせる顔などない。……謝りたい、謝れない。だから。

「……頼むから、幸せになってくれよ。……幸せに、してやってくれよ」

浜辺に座り込んだままの二つの背中に向かって、心の底からそう思う。せめて、生きている彼女には、幸せになってほしい。オレが許されただけとか、そんな言い訳は関係なく、ただただ、純粹に口に出すつもりもなくぼつりとそう零すと陣内さんがオレにハンカチを手渡してくれた。何故、と思って瞬きをして、初めて自分が泣いていたと気が付いた。慌てて借りたそのハンカチで目の下を拭くと、陣内さんは相変わらず微笑んで智のほうを見ていた。泣き顔を見ない振りをしてくれるのも紳士だと、少しやつかんだ。

「……智様にとっては、体が入れ替わってしまったことも決して悪いことばかりではなかった」

独特の渋い声を響かせて急に陣内さんが話し出すのを、オレは鼻を噤って耳を傾けた。

「あのまま元の体であつたなら智様はお付き合いされていたお嬢様と結婚されていたでしょう。ところが小学生の体になってしまったため、全ての計画は白紙になりました。そして、結果的に今、ご自身が真に思いを寄せる方と結婚することができた。これは、嬉しいことでしょう？」

オレは何とも言つことができずに黙っていた。喉の奥で涙にならなかった何かが詰まっついていて痛いのに、陣内さんの話はどこか別の方角へ向かっている。

「そして……真央様がもし真央様のままであつたら、果たして小学生の体の智様を受け入れてくださったか、結婚できたかどうか、という問題になりますと、わたくしは少々困ってしまいますね」

「……それは、望み薄、だろうな」

陣内さんの言わんとすることに思い至つて、オレは正直に思ったことを口にした。ハワイの海であつたときのマオは知己に夢中で、とても他の男の入る隙などなかったからだ。

陣内さんもオレの言葉に小さく頷いて笑った。

「わたくしとしては智様が幸せになってくださることが一番ですからね、今の状況は願ったり叶ったりなのです。亡くなられた本物のケリー様と知己様には申し訳ありませんが。……ですからね」

なんとも明け透けな物言いに、オレは何と返したらいいか分から

なかったが、見方によつてはそう、智は今幸せだろう。もし智の体が入れ替わらなかつたら。もし真央とケリーが入れ替わらなかつたら。そしてオレと知己が入れ替わらなかつたら。

誰かを失つて、深い悲しみがあつて、どうしようもないやるせなさで隣合わせであつても、そうでなければ存在しない、今。聞いたこともない、ありえないような奇跡の上での幸せ。

陣内さんは優しい声音で言ってくれた。

「全てがあなたのせいではありませんよ」

その言葉は、オレの心の防波堤を決壊させるのに十分な威力を持つて染みた。滲む視界の中で、傷む胸と喉を感じながら、ただ願う。どうか、どうか幸せになつてくれ。ケリーの分も、知己の分も、幸せに、どうか。

オレはどうしようもない馬鹿で、こうして人の人生を奪つて生きて、ようやく誰かの幸せを願える人間になれた。もっと早かつたらなんて今更過ぎて笑えない。取り返しのつかないことが、どうにもならないことがこれほど苦しいなんて、あの頃のオレは何一つ知らなかった。

砂浜を見下ろす道路の手すりにもたれて崩れ落ちそうになったオレを、陣内さんの手が支えてくれた。泣き続けるオレの背中をゆつくり擦ってくれる。

「大丈夫です。あの二人ならきつと幸せになりますから。いいですか、結局一番大切なのは」

励ますように降ってくる言葉にオレは必死に嗚咽をこらえて耳を

澄ます。

「今、生きている人間の幸せなんです。だから、あなたも幸せにならないといけないんですよ」

なんでこの人は人を泣かせる言葉ばかりを言うのだろうと思う。言葉と行動に振り回されて、結局オレは何をしに陣内さんに付き合っただのかわからない。もしかしたら最初からこうなると予測していたのかもしれないけど、陣内さんの考えなどオレみたいな凡人には到底想像も及ばないだろう、いや分かりたくもない。

必死に呼吸を整え、体勢も取り戻したオレは、涙で潤んだ目を擦って、当初出歯ガメに來たはずの二人を見下ろす。

いつの間にかケリーが、智の肩にもたれかかるようにしている。いい雰囲気だ。きっと、想いが通じ合ったんだろう。ちぐはぐな二人だけど、二人が幸せなら、それで。体裁や世間体や常識なんてどうでもいい。この、この上ない貴重な、幸せの前には。

「……帰りましょうか」

またも絶妙なタイミングで陣内さんが言った。オレの顔を覗き込むような格好でそう言った陣内さんの顔を見て、オレはふと思った。

「……陣内さん、ひとつ聞いても？」

「なんででしょうか？」

オレの突然の言葉にも少しの動揺も見せず、彼はゆっくりと首を傾げた。その顔、目の色、目元。

「……智の今の体の元の持ち主って」

聞いてはいけなかったかもしれないが、オレはほとんどの確信を持って尋ねる。そしてきつと陣内さんなら答えてくれるだろう。『生きている人間が幸せになることが一番大切だ』と教えてくれた彼なら。

そして陣内さんはもうすっかり見慣れた柔らかな微笑でもって答えてくれた。

「……わたくしの、孫息子でした」

その微笑が、誰かに似ているとずっと思っていたけれど、それは他でもない智で。

途方もないやるせなさがおレを包む前に、完璧な執事は二人の間の微妙な空気さえもコントロールした。

「……さあ、帰りましょう。帰って御夕食の支度をしなければなりません。今日はお赤飯を炊かねばなりませんからね」

軽妙な響きにオレは思わず笑顔になり、それ以上の言葉を飲み込んだ。……聞く必要なんてない、これ以上。

「ああ、オレも仕事に戻らなきゃな」

一歩二歩、その場から歩いたところで最後に振り返って、すっかり暗くなった浜辺に未だ佇む二つの影を見る。ぴつたりと寄り添う背中が語るのは、万人が認める愛、そのものだと思う。

「……じゃーな」

オレは小声で呟いて、既に歩き去っている陣内さんの後を追った。

* * * * *
* *

ひとりで波と遊びながら、私はちらちらと智を見た。いつまであの格好でいるつもりなのか、砂浜の上で所謂体育座りをして縮こまっている。へこんでるなあ、と人事のように思って、私って意外と意地悪な面もあったのねと再発見する。だってあのしょぼくれた様子がなんだか可愛いんだもの。

あまりに智が何も言わず、動かないものだから、私も一人遊びに飽きてしまって、放り出していた靴を拾って智の隣へ腰を下ろした。夕日が落ちるのは反対の方角にあるこの海岸は、薄暗くなってもうすっかり夜の雰囲気だ。海の方角には光もなく、ただ月明かりに波がきらきらと反射するだけ。

冬だったらこんな場所にいらなかったかもしれないが、秋の盛りの今はぎりぎりまだ大丈夫だ。隣で呼吸する暖かい存在に身を寄せるように黙って距離を縮める。

私のごそごとと身じろぎしていると、不意に智が口を開いた。

「……ねえ、正直に言ってくれる？ ケリーにとって、僕は、何？」

小さくなっているから、私からは頭頂部のつむじしか見えない。でも分かる、彼がどんな表情をしているのか。長時間悩んでいたからきつと、絶望に沈んだ思いつめた顔をしているだろう。そろそろ意地悪をやめてあげようと思う。何事も引き際が肝心だ、面白がつて伸ばしすぎると取り返しのつかなくなることもある。

「智、ねえ、こっち向いて？」

智の小さな背中にそつと手をやって、覗き込むようにして囁いた。妙に優しい響きになって照れくさい。智は俯いていた顔をゆっくりとあげ、不安げな表情で私と視線を合わせようとはしない。

その表情に、男の人って、勝手に追い詰められて情けなくなるのとあるのよね、と笑いそうになって不意に、“彼”を思い出した。

よくこんな表情で私を見つめてきた彼。妙に自分に自信のない人で、私がいつも背中を押してあげてたつけ。顔が悪いから、とか背も高くないしスタイルも良くないし頭だって……とよく落ち込んで身動き取れなくなるような、情けないひとだったけど。

——私が好きになる人ってやっぱり似たような人なんだな。

「……私にとって智はね、可愛くて、ちよろちよろしてて、スーツが似合って時々男らしくて」

私は指を折りながら思ったことを並べ始めた。智はきょとんとして私の言葉を聞いている。

「ちっちゃくてでも頼りがいがあって、仕事してるときはカッコい

い。それからいつも私のことを気にしてくれて、気遣いがあつて、優しい。でもよく一人で考え込んでしまつてどこまでも沈んでいくのよね、その辺はどうにかして欲しいけど、あとは……」

私にとって、知己は人生で最後の愛だと思つていた。だから彼を失つたとき、私がケリーになつてしまつた以上の衝撃を受けて自暴自棄になつてしまつた。それほど、好きだつた、愛した人だつた。

けれども今、私の視線は目の前にいる可愛らしい男の子に向いている。私が思いつくままに挙げていく言葉を、大きな目を瞬かせて聞いている智。始まりはハチャメチャで、どうしたらいいかと思つていたけど、すっかり隣にいるこの小さな存在に慣れてしまつた。体は小さくても大きな何かで私を包み込んで放さない、そんな人が私と知己が過ごした時間を、知己という存在を、いつの間にか過去のものにしてしまつた。

——だから、知己。ありがとう。……さよなら。

「……時々、いやしょつちゆうかな、情けないところもあつてヘタレだけど、でもそんなところも可愛くて……好き」

顔から火花が出るんじゃないかと思うくらいに照れた。たつたひと言、今の想いを言うだけなのに。智の方は見たいけれども見れない。……告白つて、いつだって勇気のいる大仕事だ。

「……何か食べてるときに頬つぺたがもごもご膨らんでるところも可愛くて好き。小さな手で髪を撫でてくれるのも、手を繋いでくれるのも、好き」

小学生を前にして、こんな風に思ふのはちょっとおかしいのかもしれない。

れないけど、中身が完全に子供じゃないんだもの、シヨタコンには当たらないわよね？

「仕事中の真剣な顔も好き。論理的な物言いでおじさんをちよるまかしてるところを見るのも好き。大人なスマートさを普通に発揮してくれるところも、自然にフォローしてくれるところも、す……」

き、と言おうとして、智が真っ赤になって固まっているのを見て慌ててその顔に手をやった。呼吸も止まってしまったような固まりぶり、私は鼻と口に右手をやり、左手で手首の脈を確かめてしまった。呼吸はしている。脈は過剰なほど早かったけど。

「……け、り」

「え、何？」

ようやく智の唇が動いて声を発したので、私は慌てて聞き返した。ぎぎぎ、と音を立てるようにゆっくりと、智が首をめぐらせてこちらを見た。視線が、完全に合う。

「ケリー、は、僕のこと、好き、だった、の？」

出来の悪いロボットのよう途切れ途切れにそういった智に、思わず噴出してしまった。全く気付いていなかったなんて、なんて鈍感なんだろう、この人は。あんなに仕事も早くて、大局を見渡してて人の扱いだつてうまい社長さんなのに、恋愛音痴だなんて。

笑い出した私を見て、からかわれたと勘違いしたのか、智はぷくつと頬を膨らませた。見上げて来る睨むような視線も、その外見じや逆効果だつて気付いていないんだろうな。

「ふふ、ごめ、智。あのね、あんまり可愛くってつい笑っちゃった
だけだから、勘違いしないで！」

それでも止まらない笑いを必死で抑えるように私は手で胸をドン
ドンと叩いた。ゼーハーと大きく息をして呼吸を整える。考えてみ
れば、こんなにたくさん笑うのは久しぶりかもしれない。

「……ね、智。好きじゃなかったら、一緒にいないでしょ？ 一緒
に住まないし、ご飯も食べないし、買い物だって行かないよ」

私は真面目な顔で至極当たり前のことを言う。智は私が、仕方な
く智と一緒にいるんだと思っていたのかもしれない。どこにもいけ
ないように選択肢を奪われた私が、好きではない智の元で、仕方な
く生活しているのだと。

でもそれは違う。好意がなければそんなことは出来ない。私は、
今まで認めようとしなかっただけで、小さな好意の種が育っていく
のを知っていた。どんどん好きになっていくのを、認めようと
しなかっただけで。

智は目を見開いて私を見ていた。それほど意外だったなんて、好
意もなしに智にお世話になってお金だけ消費させる私って、どれだ
け面の皮が厚い女を想像していたのだろうか。なんだか複雑な気持
ちになって、私は半眼で智を見た。私はそんなあつかましいだけの
女じゃない、という意思を込めて。

その視線の意味をきちんと読み取ったのだろう、勘は鈍くない智
は慌てて両手を振って言った。

「いやっ、別に、疑ってるわけでもなくって、あ、あの、僕、全然
気付かなかったからっ、び、びっくりして」

そりゃそうだろう、素直で可愛いのが取り柄の智だ。おじさんたちとの腹の探りあいには慣れていても、恋愛には疎いのだろう。私が傍にいる理由を思いつかなかったに違いない。

「ふふ、智らしい」

そういつてくすりと笑いを零すと、智もほっと息を吐いて同じように笑った。

しばらく笑いあった後、私はなんとなく智の肩に頭を寄り掛からせた。肩幅もまだ狭い、小さな肩。重みを掛け過ぎない様に調整しなければならいし、智は私よりも座高が低いから首が痛くなりそうだったけど、そうしたかったから。

智は一瞬びくつと体を震わせたけれども、黙って私の頭を支えてくれた。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

ケリーが、僕の肩に頭を乗せている。

これ以上ないくらいにぴったりとくっついた体から、暖かい体温が伝わって来る。緩やかな呼吸の音が、波の音よりも近く僕の耳に届く。

今、この瞬間。

幸せってこういうことかと、初めて思う。

君にとって僕は何なのか、などと聞いてしまって、僕はすぐに後悔した。

君の意志を確かめる前に勝手に結婚を成立させてしまった男だ、どこにも行けないように縛り付けて、付き纏っている迷惑な男、なんて言われたら立ち直れる自信なんてない。絶望的な最後が頭をよぎって僕は体を縮ませた。顔なんて見られない。君の顔に僕に対する侮蔑が表れていたら、僕はどうかなくなってしまいそうだったから。それでも君が優しく言うものだからなんとか顔を上げ、そしてまた後悔した。君の脳裏に“彼”がいることが分かったから。僕の顔を見ながら彼を思い出していることが、君の表情からわかってしまったから。

やっぱり彼のこと忘れられないのか、と冷や水を浴びせられたような衝撃が走る。別の男のことなど考えないでくれ、と叫びたかった。君にとつてただひとりの男になりたいと、泣きそうになりながら強く願った。

そして。君は思ってもみないことを言い出した。

僕を好きだと言ってくれた。

僕を。他の誰でもない、この、僕を。

知らなかった、君から見たら僕はそんな風に見えていたなんて。

……可愛くって時々カッコよくてしょっちゅう情けない、でもそこが可愛い。

可愛いなんて言われて喜んではいけないのだろうけど、本来なら素直に喜べないだろうけれど、今の僕は甘んじて受け入れよう。仕方がない、こんな小さな体では何をしてても可愛くなってしまうのだろう。それより君に可愛いといってもらえる方が嬉しいから、別にいい。どんな言葉だって何だってかまわない、君の興味を引けるなら。君が僕を好きだと言ってくれるなら。

肩にかかる重さを感じながら、僕はこの上ない喜びを感じて体を震わせた。この重さは幸せの重さだと思う。君が、僕に寄り掛かってくれる幸せ。

「……頑張って早く大きくなるからね」

長い沈黙を破って僕がそういうと、君は海のほうを向いたままでくすくす笑った。

「なあに、急に」

「だって今ケリーは僕に体重掛け過ぎない様に気を遣っているだろう？ 僕の肩がもつと広くなれば、もつと大きくなれば遠慮しなくて済むから。それに僕の背が足りないせいで、ケリーの体勢が苦しいんじゃないか？」

ケリーの体が緊張していることくらい、僕にも分かった。体の小さな僕に負担をかけすぎないように、自分の体を強張らせていると。だから僕は早く大きくならなければ。ケリーに見合った、いい男にならなければならぬんだ。体も、心も。

「ふふ、だけど急いだってすぐには大きくならないわよ。一つずつ年をとって、少しずつ大きくなっていくんだもの」

ケリーが笑うとその揺れが僕の肩に伝わって来る。僕はケリーの金の髪にそつと頬をすり寄せた。

「それは分かってるけど。でも頑張ってみるよ」

柔らかな感触と優しい匂いがした。ようやく、君に近づけた気がする。僕は幸せの余韻にくらくらしながら、瞼を閉じた。……が。

「あー!」

ケリーが思い出したように声を上げ、そのまま頭も上げてしまつて、僕は一瞬にして暖かい夢から現実に戻ったような気持ちになった。何があったのかとケリーを見たら、彼女は打ちひしがれるようにして呟いた。

「……結局何も買えなかった……」

「え、何? 何か買いたかったの?」

そういえば今日広場の店を回っている間中、彼女は一人でどこかへ行きたがっていた。それを誰かに会いに行くのかとか勝手に危機感を感じてことごとく阻止した僕。僕を撒こうとしてまで一体何を買おうとしていたのか。

僕が彼女にそう尋ねると、彼女はうろんな顔で僕を見ていった。

「明日、何の日か覚えてる?」

不機嫌そうな低い声でそう言われて、僕は頭の中のスケジュール帳をめくる。明日、明日……。はて、明日は日曜日だ、会社も休みだし仕事も休み。強いて言うならケリーと何をして過ごそうかと遊びの計画を練っていたただけだったな……。うーん、ケリー（真央）の誕生日は春だし、祝日でも記念日でもない。

僕がなかなか思い出さないのを見てケリーはわざとらしく大きなため息をついた。

「自分の誕生日ってそんな簡単に忘れるもの？」

呆れたようにそう言われて、僕はすっかり忘れていた自分の誕生日を思い出した。

「ああ、そういえば、そうだったっけ」

なにしろ本来なら三十一歳の誕生日だ。男が三十過ぎて自分の誕生日をお祝いしようと覚えているはずもない。日々の忙しさに忙殺されて気付いたら過ぎてた、というのがほとんどじゃないだろうか。僕の場合は毎年陣内や屋敷のスタッフがケーキやプレゼントを用意してくれているが、それも当日渡されてから思い出していたのだ、自分から覚えてはいなかった。

そしてはた、と思い至って今だ呆れた顔でこちらを見るケリーを見つめ返した。僕の誕生日を知っているということ、そして何かを買いたかったというのは……。

「……サプライズにしようと思ってプレゼント探しに来たのに。何も買えなかったじゃない！」

僕の期待に満ちた視線を読み取り、ケリーはため息をついてそう

零した。不満そうではあるが、なんだか照れくさそうにも見える。
散々僕を撒こうとしていたのは、僕へのプレゼントを買ったためだったのか。

「……ニヤニヤしすぎ」

ケリーは半眼でこちらを見て針を刺すようにチクリと言う。そんな辛辣な言葉も全く気にならない。彼女の照れ隠しなのだ、僕は遠慮なくニヤニヤし続ける。……誰がなんと言おうと、僕は嬉しくて仕方がないのだから。

僕がひとりでにやけていると、彼女は立ち上がって背伸びをした。いつの間にかすっかり夜になってしまった。もう帰らないと陣内やシェフが夕食を用意して待っているだろう。

僕も立ち上がってお尻に付いた砂を払う。彼女は黒い海を照らす月を眺めていたが、不意にこちらを振り返って言った。

「明日、……晴れたら」

もじもじとしているのがこの上なく可愛い。

「明日、晴れたらさ、また買い物に来ようよ。もうサプライズじゃなくなっちゃたから、智の気に入ったもの、選んでよ」

そう言うてはにかむように笑った彼女の笑顔は何にも代え難い宝物だと思う。正直、僕が欲しいものはお金で買えないもので、それも幸運なことに既に手に入ってしまったから、買いたいものなどないのだけれど、君と一緒にいられるなら、どこだって行きたい。明日が雨でも、嵐でも。

「うん、そうしよう」

僕は笑って、自然に彼女の手を取った。彼女も僕の手を握り返した。ちよつと冷えてしまったその柔らかい手で。

——ねえ、僕の手はまだ小さいけれど、君を守れるようにすぐに大きくなるよ。だからずっと、傍にいてくれ。それが僕が君から貰いたい、一番のプレゼントなんだ。

「……帰ろう」

明日、晴れたらまた海に来よう。今度は昼間の暖かい海辺を二人で散歩しよう。またソフトクリームを買って二人で食べよう。

取り留めのない会話、明日の計画。

僕たちは一緒に帰る。手を繋いで、一緒に。

（後書き）

『雨の降る日に』は、あまりに鮮烈な夢を文字に起こしてみた、というだけのことだったのですが、まさか続編を書こうとは思っても見ませんでした（笑）恐らく智くんの念力かもしれません。僕たちのその先を書け〜という。

私としてはとても楽しんで書けた作品です。無理矢理短編扱いにしたのは、連載として長く書く様な内容ではないかなと思ったためです。長過ぎて疲れてしまった方、申し訳ありません。

滅茶苦茶な設定で、ところどころ重い話になっています。いろいろ思うところはあるかと思いますが、それでも気に入っていただける方がいらっしやれば幸いです。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

蔡驚娟

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5957y/>

明日、晴れたら

2011年11月18日05時49分発行